

にわたりこれあり」「土佐国編年紀事略」原漢文とある。

〃 9、甲殿の住吉神社は痘瘡に靈験ありとされた後述。

〃 10、藤原純友は自身幡多郡を侵して放火、またその妻は幡多郡松尾坂（宿毛市）で憂死したという「高知県史古代中世編」。

〃 11、「土佐国編年紀事略」によれば、長宗我部時代、「廻船大法」は土佐神社に蔵せられていたという。

〃 12、岡本健児氏によれば、横倉山は発掘された須恵器、経筒から平安時代開基という「高知県史考古編」。

〃 13、土佐における国司制の動揺、崩壊については「高知県史古代中世編」参照。

〃 14、これら名主は長者とも呼ばれ、その構造は森鷗外の「山椒大夫」の示すところのようである。

〃 15、明治初年西畑村では、この蔵の払い下げを受けて小学校々舎とした。

## 中世編



源 希義墓（高知市介良）

源希義の死 土佐国―高知県の歴史で、もっとも研究のむつかしいものに吉良氏の興亡がある。いわゆる根本史料として、伝えられた吉良氏に関するものがきわめて少ないうえ、ほとんど唯一の記録である「吉良物語」が、後世のものであるため、その記事に多くの疑問が持たれるからである。しかしながら、吉良氏そのものが、吾川郡弘岡村の国人こくにんとして戦国時代繁栄し、南学の伝来等に重要な役割を果たしたものである以上、「春野町史」としては、何としてもその解明に勉めなければならないものである。いま古来の記録、伝誦をなるべく採録し、そのうえで疑わしきは疑わしきとして示し、なお今後の研究に期待して本稿を綴るものである。

「吉良物語」には「斯に土州吉良の系譜を按ずるに、元祖の冠者希義と云ふは、左馬の頭源義朝の御子にて頼朝卿同母の御弟なり」として、吉良氏の遠祖は源義朝の子で、頼朝の弟の希義であるとなっている。この希義が果して吉良氏の遠祖であったかどうかは別にして、希義については鎌倉幕府の記録「吾妻鏡」に、左のように示されて疑問のないところである。すなわち寿永元年（一一八二）九月の、

廿五日关巴、土佐冠者希義は武衛（頼朝）弟也、母季範女、去る永暦元年（一一六〇）故左典殿（義朝）の縁坐により、当国介良庄

### 鎌倉期の春野

#### 吉良氏の起り

に配流の処、近年武衛東国に於て義兵を挙げ給うの間、合力の疑いありと称し希義を誅すべきの由、平家下知を加う。仍て故小松内府（重盛）家人蓮池権守家綱、平田太郎俊遠各当国住人、功を顕さんとして希義を襲うを擬す。希義日來夜須七郎行宗土州住人と約諾の旨有るに依り、介良城を辞して夜須庄に向う。時に家綱俊遠ら吾河郡年越山に追到して希義を誅し讞由を聞き、空しく以て帰る。而して家綱俊遠ら又行宗を討たんと欲するの間、船を粧いて一族之に相乗り、仏崎より海上に浮びて逃亡す。家綱ら其の船津に馳せ到り、先ず行宗を度らんとして二人の使者を行宗の船に遣し、談合すべき事あり来臨すべきの由を称す。行宗家綱らの造意を察せしめ、二人の使者を斬り且つ船に掉さして紀伊国に赴く。原漢文。

右の記録も、細部においては疑問がないわけではなく、ことに希義の殺害された吾河（川）郡年越山については、吾川郡にはそれに当る地名がない。あるいは年越—鳥越（弘岡中）ではないかの説もあり、近世の土佐の歴史研究者を悩ました問題であったが、希義の流罪となっていた介良庄（高知市介良）と、夜須行宗（家）の夜須庄（香美郡夜須町）とから、自然その中間の地域ではないかと考えられ、結局長岡郡坂折山（南国市坂折）とされた「土佐幽考」。全体の経過から考えて自然であり、したがってまた行宗（家）が希義の死を聞いて兵を還した野宮の位置も、坂折山の東方の香美郡大谷村西の野中（同郡野市町）と定められたのであった「土佐幽考」。

ところで、平重盛の家来であった蓮池権頭家綱については、その姓から考えて高岡郡蓮池城（土佐市）に在城したことに疑いはなく、平重盛の家来として権頭と名乗るのは、前述平氏の知行国となった土佐国における、平氏勢力を代表するものである。前述のようにおそくは在序を指揮して土佐を支配したものである。仁淀川右岸の高東平野の中央にあって、東半の自然堤防と西半の低湿地水田の両者を踏まえ、高岡庄の在地勢力として台頭したものである。もっとも平田太郎俊遠の居住地はよくわからないが、この点については後でまた述べることにしよう。とにかく蓮池権頭家綱が川を隔てた高東平野に在ったことを除いて、源希義の死は春野地方とは一

見何の関係もなく、ただ希義攻撃のための家綱の率いる人馬のどよめきが、一時あった程度であろうが、別にまた家綱の勢力が、吾南にも及んでいたことも考えられよう。

さて希義が殺害されて後三年、元暦二年（一一八五）の「吾妻鏡」の記事に、土佐国介良庄住の僧琳猷上人が出る。すなわち上人は、希義を殺した家綱らは、その「死骸を遐迹（遠近）に曝さんと欲す、爰に土人の中忠あるの輩ありといえども、平家の後聞を怖れ葬礼の沙汰に及ばず、而るに上人は往日の師檀を以て、埴田郷内に墓所を点じ歿後を訪うこと未だ怠らず」原漢文というのである。平氏権力を怖れず希義を葬った琳猷の勇氣は、この時いたく頼朝を感激させ、改めてその功を賞している。すなわち「吾妻鏡」に「上人の住所介良庄恒光名、津崎在家の万雑公事（ばんざうこうじ）を停止され畢んぬ」原漢文とあるように、介良庄内で若干の所領を与え、西応寺を建立、希義の後世を弔らせたものである。「介良風土記」橋詰延寿によれば、希義の

墓碑は大きな松のもとにある。山石を正方形に築いた一メートルの台座に、さらに二重台座があり、その上に高さ四〇センチの卵塔形である。地面から二メートルあまり。卵塔には文字のあとらしいものが見えるが、残念ながら全く読めない。

さすがに八百年の過去である。長い風雪にたえた姿といえるのであろう。それにしても介良庄とあれば、介良、吉良と発音の近いほか、また春野地方と何の関係もなさそうである。ここで筆者は冒頭でふれた「吉良物語」に返って、吉良氏の起りについて語らねばならないことになった。

吉良氏の起り 「吾妻鏡」の記事と対比しながら、以下「吉良物語」を讀んでいただきたい。頼朝の挙兵は土佐にもはるかに伝えられてくる。

希義ほのかに聴きて喜び、密に同意の者をかたらう処に、世々高岡郡を領せし平家譜代の蓮池権頭家綱、伊勢より先年移り来て吾川郡を知行せし平家一族に平田太郎俊遠等、大臣殿の命に依って養和元年（一一八一）数十騎を帥いて是を討たん

